

## 21. レジャーダイバーの高気圧障害に関する実態調査 その2 ー減圧症と高所移動ー

眞野喜洋\*<sup>1)</sup> 芝山正治\*<sup>2)</sup> 山見信夫\*<sup>1)</sup>  
 内山めぐみ\*<sup>1)</sup> 東美奈子\*<sup>1)</sup> 中山 徹\*<sup>1)</sup>  
 中山晴美\*<sup>1)</sup> 水野哲也\*<sup>3)</sup> 高橋正好\*<sup>4)</sup>

{ \*<sup>1)</sup>東京医科歯科大学医学部保健衛生学科  
 \*<sup>2)</sup>駒沢女子大学  
 \*<sup>3)</sup>東京医科歯科大学教養部  
 \*<sup>4)</sup>資源環境技術総合研究所 }

【目的】レジャーダイバーを対象に高気圧障害全般について聞き取り調査を行い、減圧症と高所移動の安全対策について検討を行った。

【方法】高気圧障害の罹患について聞き取り調査とアンケート調査を行った。

【結果と考察】罹患経験者は、耳の障害で32名(10%)、副鼻腔の障害で25名(8%)、肺破裂では1名存在した。減圧症の罹患経験者は9名(2.8%)、いずれも1回だけの罹患経験であった。男性が8名、女性が1名で90%が男性であった。職業別ではインストラクターが2名であったが、その他はレジャーダイバーであった。タンク使用本数と減圧症発症との割合は、14,000本に対して1回の減圧症の罹患割合であった。

高所移動は、調査地の西伊豆から伊豆半島・箱根・東名高速で御殿場・その後の山中湖を經由する者が対象となる。高所の海拔では、伊豆半島で約800m、東名高速の御殿場周辺で約400m、国道1号線で約820m、東名高速を經由して山中湖の周辺で約1000mである。

今回の調査では、減圧症と高所移動に伴う減圧症発症者は存在しなかったが、東京医科歯科大学に相談及び治療に訪れる減圧症罹患患者の中には、高所移動によって発症した患者が含まれ、潜水終了後の高所までの時間をできるだけ延ばすことが、減圧症予防のための対策であり、潜水終了後の計画を十分考慮するべきである。